

平成10年度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

平成10年度
教育研究員名簿（教育課題）

分 科 会	地 区	学 校 名	氏 名
第 1 分 科 会	新 宿 区	落合第一小学校	湊 仁
	墨 田 区	両国小学校	荒堀正実
	中 野 区	啓明小学校	宮内 健
	三 鷹 市	第三小学校	藤沢勇夫
	小 平 市	小平第七小学校	山本佐江
	千代田区	今川中学校	伊藤裕一
	港 区	御成門中学校	山口正吾
	渋谷区	笹塚中学校	岩井義晴
	八王子市	恩方中学校	廣瀬尊貴
	武蔵村山市	第二中学校	山谷安雄
第 2 分 科 会	文 京 区	林町小学校	金川由美子
	品 川 区	三木小学校	伊藤裕子
	豊 島 区	仰高小学校	坂田悦郎
	町 田 市	鶴川第二小学校	小幡則彦
	東村山市	秋津小学校	関口真実
	中 央 区	晴海中学校	加島良一
	目 黒 区	第七中学校	堀 利光
	荒 川 区	諏訪台中学校	伊藤錦之助
	昭 島 市	清泉中学校	来間正明
	瑞 穂 町	瑞穂中学校	越智浩嗣

（担当）教育長指導部指導企画課指導主事 宮 川 保 之
都立教育研究所指導主事 長谷川 純 一

目 次

I	主題設定の理由	1
II	第1分科会の研究	1
1	第1分科会研究主題設定の理由	1
2	研究の目標	2
3	研究の仮説	2
4	構想図	2
5	意識調査について	3
6	教科外の実践例	5
7	実証授業	7
8	研究の成果	11
9	今後の課題	11
III	第2分科会の研究	12
1	第2分科会研究主題設定の理由	12
2	研究主題のとらえ方	12
3	研究の内容	14
4	研究構想図	15
5	実践研究	15
	実践事例1	15
	実践事例2	18
	実践事例3	20
6	分科会のまとめ	22
	(1)研究の成果	22
	(2)今後の課題	22
IV	研究の成果と今後の課題	23
1	研究の成果	23
2	今後の課題	23

生きる力を育てる生活指導

I 主題設定の理由

これからの教育は、一人一人が自分らしく生きていくことに価値を認める教育であり、それは「生きる力」として総称されている。生活指導のねらいも、「個性の伸長」「自己実現の基盤の育成」「自己指導能力の育成」など、一人一人の人格の完成に向けての指導・援助であるので、生活指導を十分に機能させていくことは「生きる力」の育成につながると考える。したがって、これからの生活指導は、日々の問題に対処するだけでなく、本来のねらいに合わせ、「生きる力」を育てる教育を積極的に行われなければならない。

また、「生きる力」を提言した中教審の「審議のまとめ」には、「今後における教育の在り方」の(5)として、いじめ・登校拒否の問題が取り上げられている。その中で、いじめや登校拒否等の問題の解決には、「学校が、子どもたち一人一人を大切に、子どもたちが自分のよさを見だし、それを伸ばし、存在感や自己実現の喜びを実感できるような学校であることが重要である」と述べている。

このように「生きる力」の育成は、生活指導上の問題解決の上からも、今後ますます重要になると考え、研究主題「生きる力を育てる生活指導」を設定した。

II 第1分科会の研究

研究主題

豊かな人間関係を創造する集団活動

1 第1分科会研究主題設定の理由

最近の学校における子どもたちの様子を見ると、個の目標に対してはある程度の努力をするが、集団の目標にはあまり力を注ごうとしない様子が見受けられる。相手の気持ちを考えた発言や行動ができないといった、集団活動になじめない子どもたちが多くなっている。

第1分科会では、このような現状を改善するには、「生きる力」の豊かな人間性の育成が必要であり、それを生活指導の観点からいかにはぐくむかを考えた。

各個人の人間性は、乳幼児期から現在に至るまでの成育の中で培われてくるものである。その培われ方は、人それぞれである。このように培われてきた人間性を、学校という集団生活を営む場でいかにより豊かな人間性へととはぐくんでゆくか。我々は、この大きな課題を、集団生活に必ず存在する人間関係によってはぐくむことができるのではないかと考えた。

集団活動の場には、他を模倣することによるさらなる自己育成、他を見ることによって自分を省みる自己理解、共同作業を通しての思いやりや協調性の育成など、個の資質を高めてゆく多くの機能がある。

そこで、人間関係を構築する集団活動の場を設定し、豊かな人間関係を創り上げる活動を行うことにより、豊かな人間性を育成することができると考えた。

以上のような考えをもとに研究主題を設定した。

2 研究の目標

- (1) 子どもたちの人間関係の傾向を明らかにする。
- (2) 集団活動という場面において、豊かな人間関係をはぐくむための方策を探る。
- (3) 豊かな人間関係の成立が豊かな人間性の育成につながることを明らかにする。

3 研究の仮説

集団生活における人間関係を改善するにあたり、次の3つの要素が重要であると考えた。

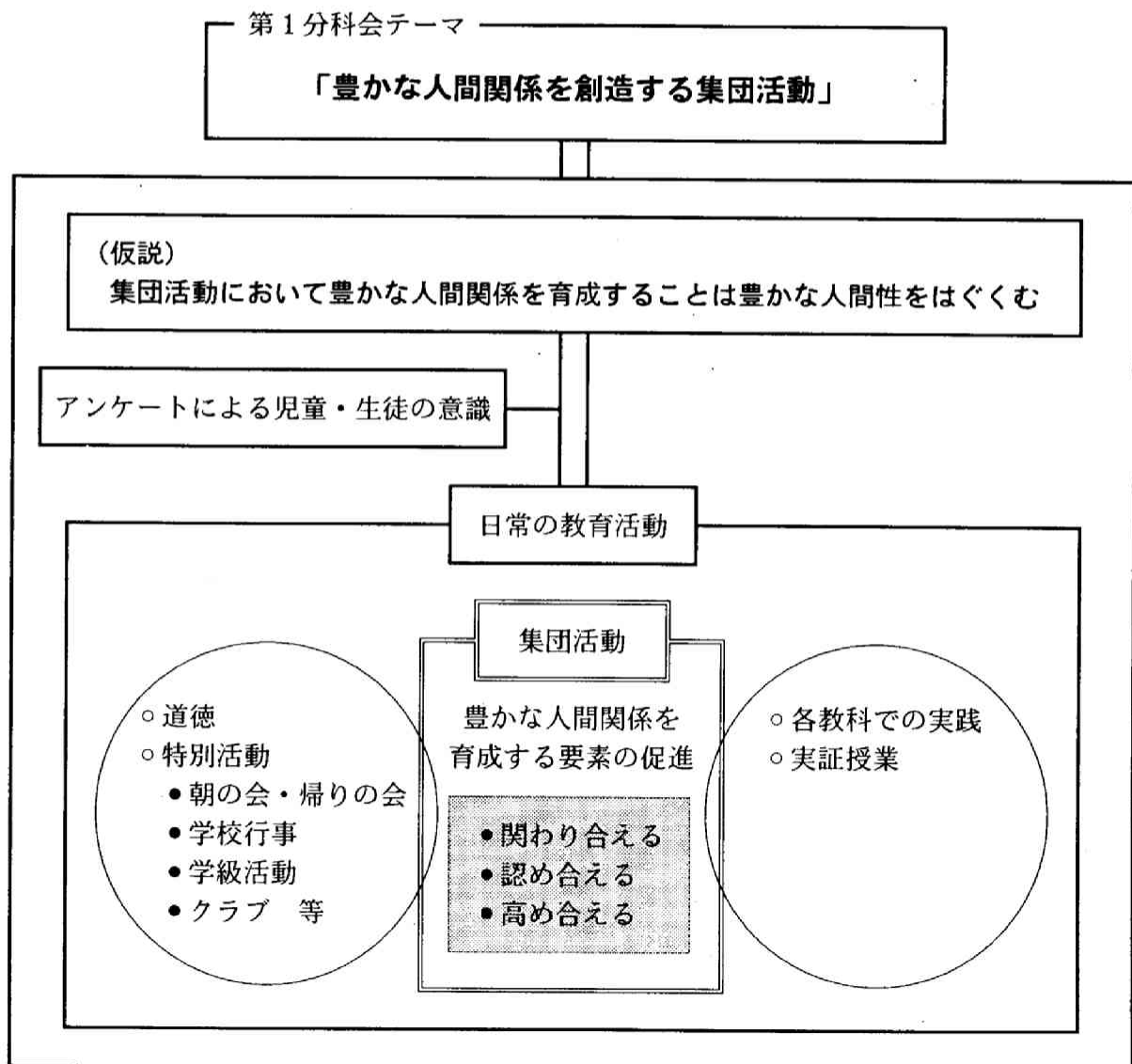
関わり合える：すすんで話しかけたり行動したりする。

認め合える：互いにわかり合い、相手を大切にする。

高め合える：仲間と協力し、めあてを達成しようとする。

そこでこれらの要素を集団活動に意識して取り入れることにより、豊かな人間関係が促進され“他を認め、他を思いやり、他と協調し、集団としての目的を達成しようとする”人間性豊かな子どもの育成ができると考えた。

4 構想図

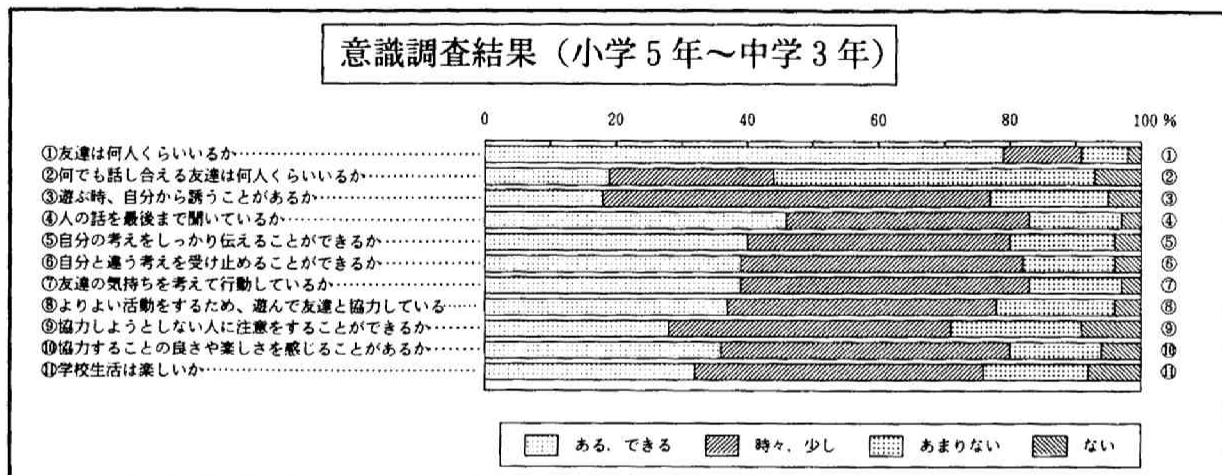


5 意識調査について

(1) 集約方法

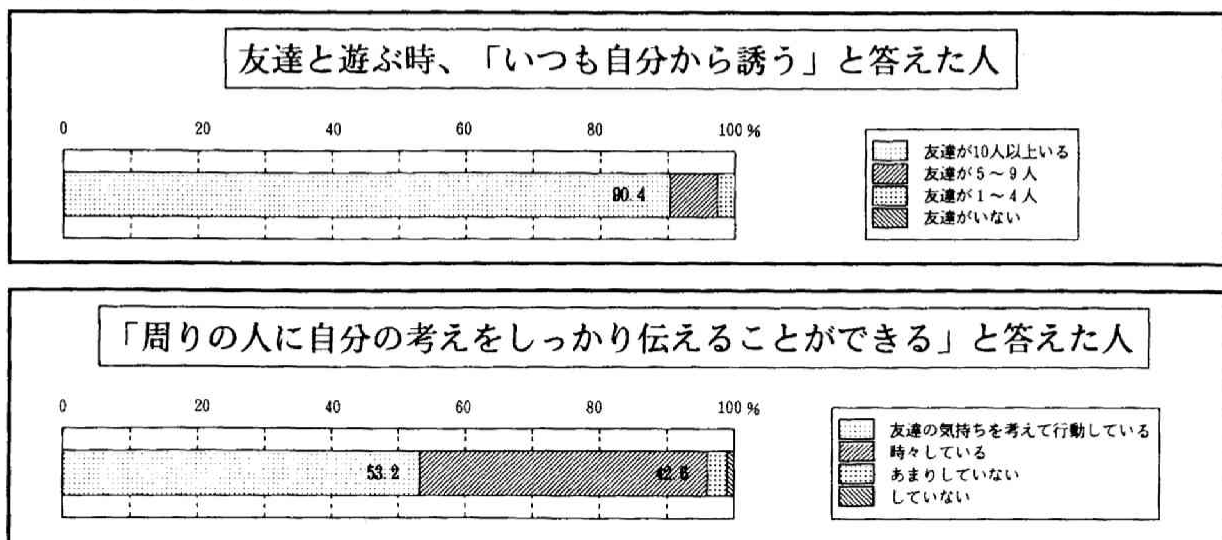
- 対象 小学校5年生から中学校3年生まで
- 調査数 756名
- 実施時期 平成10年10月

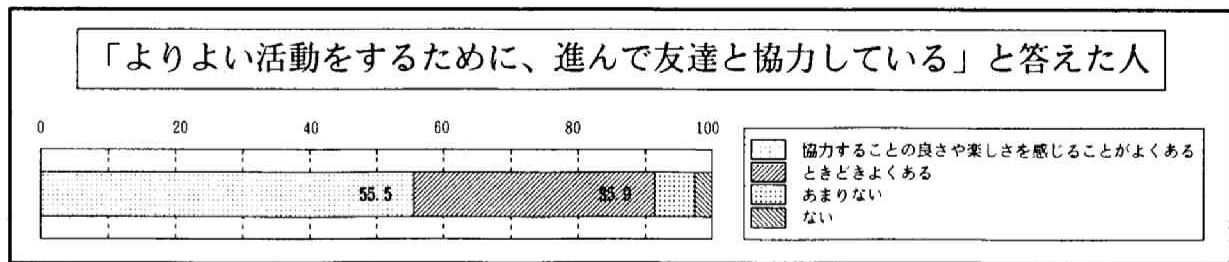
(2) 調査結果から読み取れること



- 学年が進むにつれて相手のことを考えないで行動する。（小5→11%，中3→16%）
- 中学3年生の半数は、「協力しない人に注意しない」と答えている。
- 小学6年生の89%が「協力する楽しさを感じる」としているが、中学3年生は73%と極めて低い。
- 中学1年生男子の30%が、「他人に自分の考えを伝えることができない」としている。また、学年が進むにつれ減少している。
- 小学6年生は、下級生とのかかわりが多いことや学校の中心となることなどから、「考えの違う相手のことを受け止める」と答えているが、中学生男子では、3年生の25%が「受け止めることができない」としている。

(3) 項目どうしの関係





(関わり合える …………… ③と②)

いつも積極的に友達をさそう生徒・児童は、より多くの人と関わろうとしている。

(認め合える …………… ⑤と⑦)

自分をしっかり伝えることのできる生徒・児童は相手のことを考えて行動している。

(高め合える …………… ⑧と⑩)

すすんで協力する児童・生徒はそのことの楽しさを感じ、集団の必要性を感じている。

(4) まとめ

ア 意識調査から読み取れることは、学年に関係なく「人の話を聞いたり受け止めたりすること」という受動的態度と「自分の考えを相手に伝えるという表現」という能動的な表現活動とを比較すると、後者の意識が著しく低い。したがって、そこに「関わり合える・認め合える・協力し高め合える」ことについて指導の必要性があると考えられる。

イ 小学校6年生の意識は、他の学年（小学校5年生や中学校各学年）と比較すると群を抜いてプラスの傾向にある。これは、この学年になると校内における役割がなんらかの責任をもつ立場にある。そのためには、下級生の指導や同じ仕事仲間とのコミュニケーションをとる必然性が生じ、仕事（役割）の達成感によって、小学校5年生に比べて意識が高いものとみられる。

ウ 同じように、中学校2年生において「協力しない人に注意することができるか」という質問に対し、中学校1年生は58%、中学校2年生は63%が、ポジティブな回答をしている。それはちょうどこの時期が生徒会・委員会・部活動の役員等が交代する時期で、校内のリーダーが3年生から2年生に移行する時である。

エ 同様に、達成感においても小学校6年生は群を抜いてポジティブである。

(小5→83%、小6→89%、中1→75%、中2→76%、中3→73%)

以上の調査結果から、児童・生徒一人一人が異年齢集団や学年・学級・班・係活動等で責任のある立場や役割をもって活動できるように組織し、指導していけば、意識等の高まりも認められる。

また、集団活動を通して、相互にかかわり合い、その存在を認め合うことによって、意識の高まりも期待できるという結果が得られた。

6 教科外の実践例

(1) 短学活（朝の会、帰りの会）

「帰りの会」の例

- | | |
|--------------|--------------------------|
| ① 日直の反省 | 当番としての仕事ができただろうか。 |
| ② クラス（班）の反省 | 授業中の態度はどうだったか、係の仕事はできたか。 |
| ③ 明日の授業の持ち物 | 教科係からの連絡を行う。 |
| ④ 係、委員会からの連絡 | |
| ⑤ 先生から | |

関わり合える 班の活動を評価する。

（他の人との関わり合う場面を設定する）

認め合える 自他を肯定的に評価するよう助言する。

（自分や他の人のよい面を認める習慣を身につける）

高め合える 次週の班の目標を決める。

（よりよい班になるため協力するきっかけをつくる）

(2) 週番制の日直

- 1週間単位で班ごとに日直の仕事を分担する。

美化…掲示物をはる。電気を消す。 集配…プリントを配る。

黒板…黒板をきれいにする。

※班長が休んだとき班員が代わって行く。班長は班員が分担を忘れたとき声をかける。

- 主な仕事

- 朝、帰りの会の司会をする。
- 日直日誌の記入

関わり合える 日直を班単位で行う。

（日直を通して、班員どうしがかかわる回数を多くする）

認め合える 日誌に仕事の様子を記入させる。

（仲間が努力する様子を知り、お互いを評価するきっかけを作る）

高め合える 一日の仕事を評価し、コメントを添える。

（班員どうし協力することが仕事を早く終わらせることに気づかせる）

(3) 給食当番、清掃当番

当番の分担表を作り、班長を中心に分担を話し合うことから指導を始める。班長のリーダー性を向上させることと、各班員の責任分担を明らかにする。

関わり合える 分担表を作り、班長が必要なときに班員に声をかける。

（班の会議に全員が参加する）

- 認め合える 欠席者がいるとき、班長や班員が仕事をカバーする。
 （事情で仕事ができないときに班員がそれを認めカバーできるよう指導）
- 高め合える 分担表に関係なく目的のためにすすんで行動ができるように指導をする。
 （お互いに信頼し合う人間関係の構築に心がける）

(4) 実行委員会形式による林間学校の実施

実行委員を募集すると同時に生徒の意識を高める。

- 運営の仕方
- ① 実行委員会の組織作り
 - ② 全ての運営計画を作る
 - ③ 事前学習への取り組み
 - ④ 林間学校の目標・ルール・持ち物などの検討としおりの作成
 - ⑤ 各係会との連携
 - ⑥ 林間学校中のキャンプファイヤー等の行事の計画と運営
 - ⑦ 実行委員会による反省とまとめと次の行事への申し送りのまとめ

- 関わり合える 生徒相互の意見の交換の場面を多く作る。
 （自由で活発な生徒相互の関わりを大切にする）
- 認め合える 生徒一人一人の考えを生かしたルールを実行委員会で作り上げる。
 自分の意見をしっかり伝えることと、相手の意見を良く聞き尊重することが大切である。
 （意見の積み重ねがあるので互いを尊重し、認め合いが生じる）
- 高め合える 実行委員会が自分達の組織であるという自覚からお互いに支え合い、目標を達成しようとする姿勢が出てくる。
 （次の行事で反省が生かされ、より良くしていこうという気持ちが出てくる）

(5) グループ新聞作り

係、委員会、班などで、学校や学級の生活について取材し、生活をより良くするための願いを実現する手だてとする。

- 関わり合える グループ内で記事内容について意見を交換する。
 グループ内で分担したところを自分の考えを基に記事にする。
- 認め合える 記事内容を読み、人の考えのよいところを受け止め、共感したり、賞賛したりする。
- 高め合える グループで協力し新聞を完成させる。
 読者の感想や意見を受け止めて、それを生かして次の新聞を作るようにする。
 （みんなの広場に読者カードを掲示する）

7 実証授業

(1) 単元名 ボール運動「バスケットボール」

(2) 主題との関連

① 本単元における豊かな人間関係

バスケットボールのチームという集団を中心に豊かな人間関係を築き上げるために、3つの視点における児童の姿を具体化した。そして、児童が学習活動の中でこれらの姿を高めていけるように支援することとした。

関 合 わ え り る	・チームの話し合いや練習に参加する ・チーム内の自分の役割を果たす ・自分の考えを友達に伝える ・友達に声をかけたり、応援したりする ・一人一人が協力しようとする ・協力して準備運動や整理運動を行う
認 合 め え る	・自分以外の友達を意識してよさに気づく ・チーム内で互いのよさを話し合う ・相手チームのよさを見つけ、メッセージで伝える ・友達の考えを受け止めたり、自分の考えを伝えたりする ・友達のすばらしいプレーやがんばりに気づき、他の友達に伝える
高 合 め え る	・友達のよさに気づき、自分にも生かそうとする ・友達の動きやプレーが意欲的になるように声をかける ・ゲームを振り返り自分たちに合った作戦を立てる ・チームのためにすすんで発言したり、活動したりする ・技能の高まりだけでなく心情面の高まりも大切にする ・チームで協力し、めあてに向かって学習に取り組む

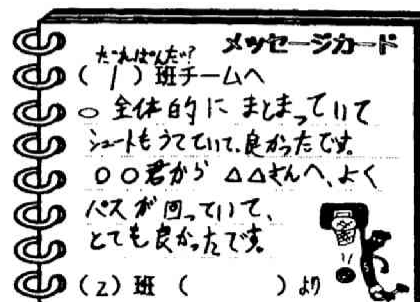
② 豊かな人間関係を構築するための具体的な方策

○ 友達どうしの言葉かけ

こんな言葉を友達にかけてもらったうれしいという子どもたちの言葉を拾い上げ、模造紙に例示し、学習活動の中で常に活用する。相手の立場を考えた言葉をつかうことでより「関わり合い」が深まり、豊かな人間関係が形成され则认为た。

○ メッセージカード

ゲーム以外のチームは審判を行うが、その役割の一つにゲームプレー中の友達のよさを見つけ、ゲーム後にメッセージを書いて渡す係を設定した。チーム以外の友達からよさを認めてもらったり、アドバイスをを受けたりすることで、相互の認め合いにつながると考えた。



○学習カードの活用

毎時、書き込める学習カードを用意した。めあて・作戦や学習の振り返りができ、さらにチームワーク度をチーム内で評価したり、その時間頑張った友達を選ぶ項目も加えた。チーム内の友達のよさや自分たちの活動のよさを確認し合えることで、認め合い・高め合いが促進すると考えた。

○ルールの工夫

自分たちが、より楽しくゲームを行うために、学級全体での話し合いの場を設定した。ルール上の問題点や改善点を話し合い、自分たちに合うルールを工夫していくこととした。それによってチーム相互の関係や学級全体を意識させ、ルールの大切さを実感できると思われる。これらの姿は社会的規範意識を高める態度につながると考えた。

③ 学習過程

時	学 習 活 動	生活指導上の視点	その他の支援
1	オリエンテーション 1.学習のねらい、学習方法 学習の流れを知る。 2.ルールやゲームの仕方を 確かめる。 3.チームを作る。	○認め合い励まし合って互 いを高め合う学習の進め 方を知らせる。 (関わり合い) ○ルールの工夫によって誰 でも活躍できる可能性を 持てるようにする。 (関わり合い)	●アンケートなどで意識を 掘り起こし、意欲的に取 り組めるようにする。 ●学習カードの書き方や学 習資料の活用方法を説明 する。 ●学習の流れやルールを掲 示する。 ●チームの能力差が出ない よう配慮する。
2 3 4 5 (本 時)	よさを見つけ認め合う 1.チームごとの準備運動や 練習 2.リーグ戦(4分ハーフ) ゲーム1 作戦タイム ゲーム2 3.話し合い(振り返り)	○チームのめあてを意識し 声をかけ合って練習やゲ ームをしているチームを 賞賛する。(高め合い) ○教え合いや声援によって 積極的に関わり合ってい て一生懸命プレーしてい る児童を賞賛する。 (認め合い) ○係児童にはゲーム中の児 童のよさを見つけられる ように助言する。 (認め合い)	●チームのめあてに合った 作戦や練習方法を選択で きるように資料を提供し たり助言したりする。 ●チームのめあてにむかっ て一生懸命プレーしてい る児童を賞賛する。 ●公正な審判をめざして ジャッジしようとしてい る。
6 7	よさを生かし高め合う 1.リーグ戦または対抗戦 練習	○一人一人のよさを生かし てチームに貢献できるよ うに助言する。 (高め合い)	●チームカードやメッセー ジカードの活用を促す。

8	作戦を柔軟に構成するゲーム	○プレー・声援・教え合い・係分担など多面的によさを認め合えるように助言する。（認め合い）	●児童の実態や願いによって学習の進め方やルールを工夫するように助言する。
9	2. パワーアップタイム		
10	（チーム内・対戦チームのよさを認め合う）	○個やチームの高まりを賞賛しそれを自覚できるようにする。（高め合い）	
11			

④ 本時の学習（5／11）

1) ねらい

- 進んでゲームに関わり、力一杯運動しようとする。
- パス、ドリブル、シュートなど自分の役割に合った動きができる。

2) 生活指導上（豊かな人間関係）の視点

- チームの仲間と声をかけ合い、協力しながら学習に取り組む。
- メッセージカードやチームカードの活用を通して互いのよさを認め合いながら取り組む。

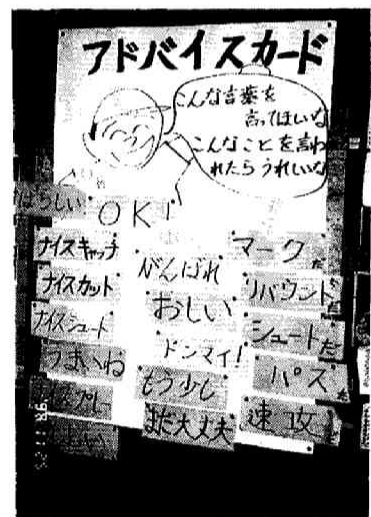
（展開）

分	学 習 活 動	支援活動及び生活指導上の視点
0	○集合、あいさつ、めあての確認	●めあてにあった作戦と練習をし、ゲームで力を発揮できるよう助言する。
5	○チームごとの準備運動 ○チーム練習 ●めあての確認、話し合い ●チーム練習	●協力して効果的な準備運動をしているチームを賞賛する。→（関わり合い・認め合い） ●キャプテンやマネージャーを中心に、みんなで意見を出し合い、練習の内容、方法を確認する。→（認め合い） ●一人一人が声をかけながら、作戦を意識した練習をしているチームを賞賛する。→（高め合い）
20	○ゲーム（リーグ戦）4分ハーフ8分 1 第1試合 ーAコート（舞台側）ー 水色班 対 赤班 （審判）黄班 ーBコート（入口側）ー オレンジ班 対 緑班 （審判）青班 2 作戦タイム（3分） ●作戦の確認や反省をする。 （審判チームがチームのよさを記入	●チームの作戦を考えながら、互いに声をかけ合いプレーをしたり、応援したりする児童を賞賛する。 →（関わり合い・高め合い） ●審判チームの記録係等の児童には、他チームのよさを見つけられるよう助言する。 →（認め合い） ●プレーのよさやチームのよさ、作戦のよさを話し合うよう助言する。→（認め合い）

	した、メッセージカードも参考に する。)	
30	3 第2試合 ー Aコート（舞台側）ー オレンジ班 対 赤班（審判）水色班 ー Bコート（入口側）ー 黄色班 対 青班（審判）緑班 ○整理運動をする	●チームの作戦を考えながら、互いに声をかけ合いプレーをしたり、応援したりする児童を賞賛する。 →（関わり合い・高め合い） ●審判チームの記録係等の児童には、他チームのよさを見つけられるよう助言する。 →（認め合い） ●協力してストレッチ運動をしているチームを賞賛する。→（関わり合い・認め合い） ●チームワークやチームに貢献した児童について賞賛したり、よさに気づかせたりする →（認め合い） ●チームごとに自チームや相手チームに見られたよさを紹介し合い、次回への意欲を高められるよう助言する。→（高め合い）
40	○本時の学習を振り返る ・チームごとに話し合う。 ○本時のまとめ ・集合、整列、振り返り	

⑤ 実証授業の成果と課題

- 審判チームからのメッセージカードによって、他チームとの交流を図り、互いのよさを認め合うことができた。
- チームの話し合いの場を設定したことで、プレー・審判の役割を明確にできた。役割を果たそうと協力して、チームワークも次第に高まっていった。
- チーム内の言葉のかけ合いがスムーズに行われるように、具体例を示した。児童のアンケートや毎時の話し合いから拾い上げたり見やすい場所に掲示したりしたので、児童相互のかわりが深まっていった。
- 毎時、学習のまとめに、チームワーク度や高まりのあった児童について話し合ったことは、互いのよさを認め、高め合いを促すことにつながった。
- 人間関係を豊かに育む3つの視点から学習過程全体における支援の在り方を考えたが、今後はさらに具体的な場面や個々の実態に応じた支援の在り方を研究していきたい。



バスケットボール チームカード

11月25日(水)

3班オジ ドラヤキ(あんなし) チーム

チームのめあて 声を出してパスをもらう

きょうの作戦

声を出してパスをもらう 動いてパスをもらう練習

反省 ③ ③ ③

ゲーム1		ゲーム2	
相手	緑 チーム	相手	赤 チーム
結果	12 対 10	結果	16 対 6

G. T. ⑦ ③

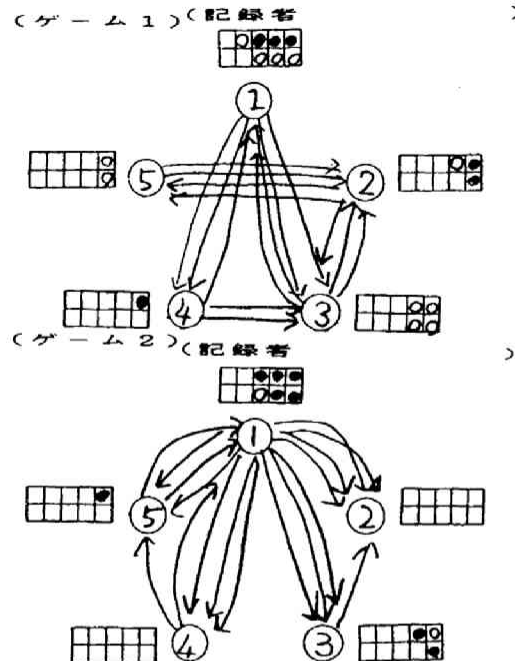
チーム・ワーク度

理由 めあても、じょうずで、たし、たえんも、しかりた。シュートもみんな入れられたから。

M. V. P (〇 〇 〇)

理由 初のシュートを入れたから。

みんなにパスが回ったかな。シュートは何回できたかな。 [シュート〇 ゴール●]



8 研究の成果

- 仮説を実証する授業で生活指導の機能を生かした要素を取り込むことにより、児童が明らかに変容して行く様子を見ることができた。
- 生活指導の機能を生かした要素を、授業の中に盛り込めるということが明確になった。
- 豊かな人間関係を創造するための「視点」が明らかになった。これにより、集団活動の支援のあり方や日常での子どもたちへの関わり方が具体的になった。
- 学習集団の質的向上によって、課題解決学習への展望がより具体化された。
- この研究を通して、校内暴力・いじめ・登校拒否など生活指導上の問題は、単なる対処療法的な対応をしては、いけないということを知りえた。これらの問題の根底には人間関係のひずみが隠されており、豊かな人間関係の創造は、これらの問題解決の糸口であるという、明確な認識を得ることができた。

9 今後の課題

- 今後、児童の実態に合わせつつ、授業・授業外の様々な機会に、豊かな人間関係を育成する要素をより具体的に対応できるような手立てを明確化するとよい。
- いろいろな教科領域においても実践を進め、仮説の実証をする必要がある。
- 小学校・中学校連携による系統立てた方策を具体化するとよい。
- 豊かな人間関係の育成は、今後も変わることのない教育目標であり、また、あらゆる教育活動の基盤となりうるものでもある。このことを我々教師が認識を新たにしなければならなかったと考えた。

Ⅲ 第2分科会の研究

研究主題

生活指導の機能を生かした学習活動

1 第2分科会研究主題設定の理由

「生活指導は機能である」と言われる。機能であるということは、教育活動のすべての領域において働くことを意味している。したがって、学習活動の中に生活指導の機能を取り入れることは新しいことではなく、従来から行われてきたことである。ただし、これまでは、「人の話を黙って聞く。」「手を挙げて発言する。」「指示されたように行動する。」など、ルールを守ることに偏りがちで、「生きる力」でいう「豊かな人間性」をはぐくむ機能を意図的に取り入れることが少なかった。その結果、いじめや登校拒否、学習意欲の低下などの問題を予防できなかった。いじめや登校拒否等に関する調査によると、一人一人の長所が認められ、意見が大切にされる学級では、いじめが起きにくく、自分が人に認められていることを実感し、困った時に助け合える雰囲気のある学級では、潜在的に登校拒否傾向のある子どもでも学校に来ることができる。また、分かる・自分なりにできる・分からないときは助けてもらえる授業が行われている学級では学習意欲の低下も起きにくいことが指摘されている。

学習活動の中に生活指導の機能を生かした場を設定し、「自己決定」の力を伸ばし、「共感的関係」をはぐくみ、「自己存在感」をもてるようにすることは、これからの生活指導の積極的な役割であると考え、研究主題「生活指導の機能を生かした学習活動」を設定した。

2 研究主題のとらえ方

(1) 「生きる力」との関係

「生きる力」には、①問題発見・解決の能力、②豊かな人間性、③健康や体力の3つの側面が示されている。生活指導は、「自分らしい生き方」を見つけるのを援助することにねらいがあり、その機能は主に意欲・関心を高める働きをするので、ここでは「豊かな人間性」に重点を置いて研究を進めた。

「生きる力」としての「豊かな人間性」については、幅広く様々な観点から考え、「自立」・「共生」・「個性」という言葉に置き換えた。

◇自立（力強さ）……………自分で生きていこうとする強い心や行動

＜自律、自立心、自己抑制力、自己責任 など＞

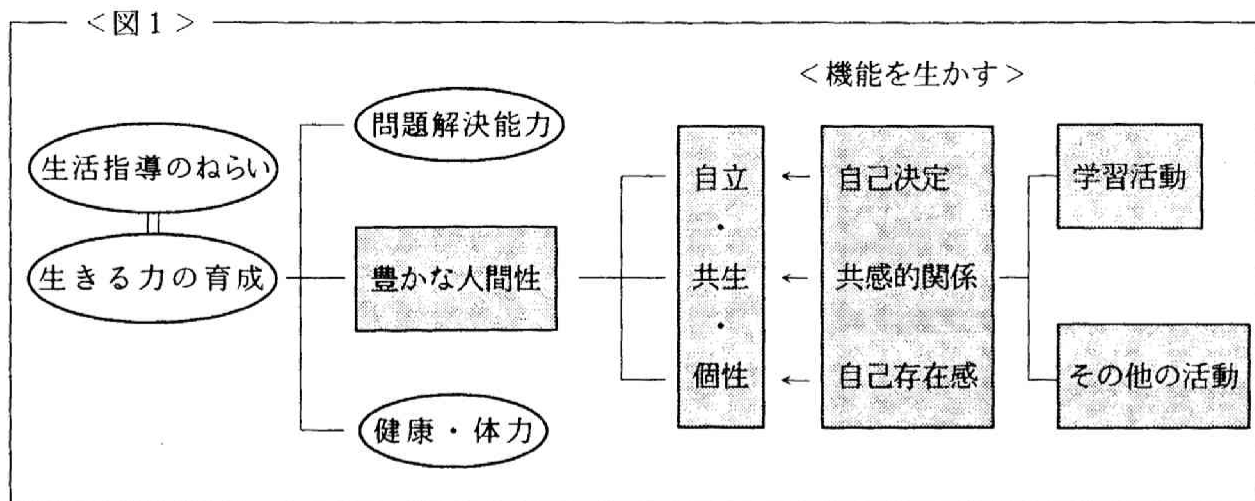
◇共生（優しさ）……………みんなで生きていこうとする優しい心や行動

＜協調、思いやり、感性、倫理感、社会貢献の精神 など＞

◇個性（自分らしさ）………自分のよさを失わずに生きていこうとする心や行動

＜自信、存在感、自分らしい価値観 など＞

この「自立」・「共生」・「個性」につながるように、「生活指導の機能」を学習の場でも生かしていけば、「生きる力」の育成につながると考えた。＜図1＞



(2) 生活指導の機能を生かす

「自立」・「共生」・「個性」につながる具体的な生活指導の機能として、次の3つの機能を取り入れて学習を構成することにし、次のように定義した。

機 能	自 己 決 定	共 感 的 関 係	自 己 存 在 感
定 義	自分を知り、 自ら決定する	お互いのよさやちがいを 無条件で認め合える関係	自分の役割を果たし、 自分の価値を感じられる
意欲との 関係	自分で決定することには喜びや充実感があるので、問題に主体的にかかわっていく意欲を高める	自分のよさを認めてもらえた喜びと、その中で一緒に学んでいる安心感が意欲を高める	自分の役割を果たしたことによる自分への自信と信頼が、次のステップへの意欲を高める

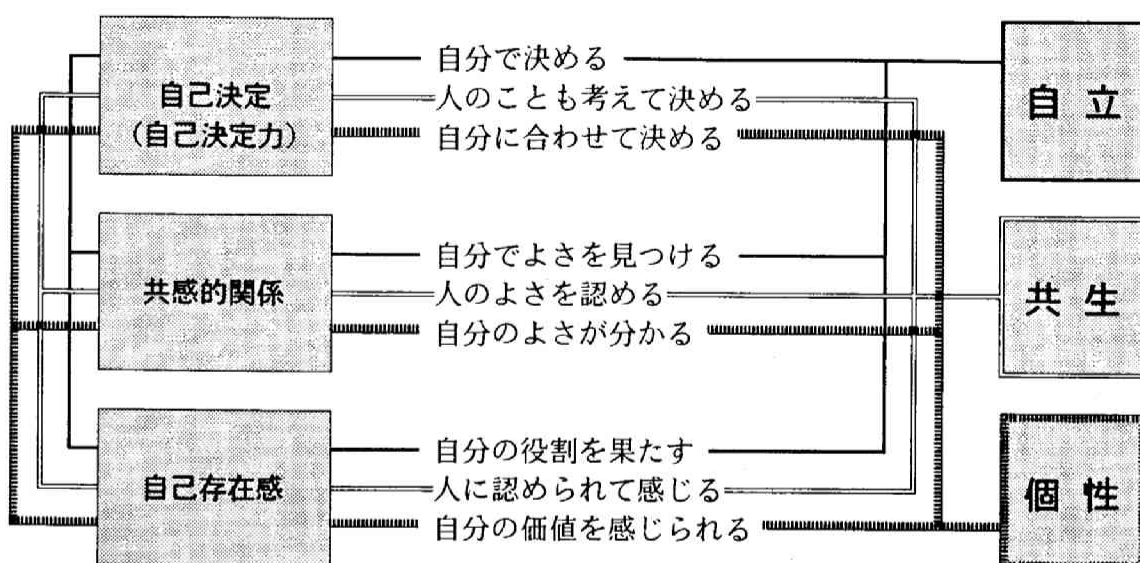
これらの機能は定義の上から、「自己決定」は「自立」に、「共感的関係」は「共生」に、「自己存在感」は個性に主につながっていくと考える。ただし、この3つの機能には、互いに関連し合う内容と、それぞれに「自立・共生・個性」につながっている要素があると考えた。したがって、研究の中では具体的な場面がどの機能にあたるとか、どの力を育てているということは、その時の置いている重点によって振り分けた。

そして、これらの機能を生かした実践によって、一人一人に「自己決定をできる力（自己決定力）」、「共感的関係をはぐくむ力（共感的関係）」、「自己の存在を感じられる力（自己存在感）」を伸ばしていくことが重要であると考え、はぐくみたい3つの力とした。＜図2＞

(3) 学習の場で展開する

生活指導の機能を学習の場で生かすということは、教科や領域の内容を同時に扱っていくので、学習として質が高く、教科の新しい重点も取り入れていく必要がある。それによって「豊かな人間性」とともに、「確かな学力」を培っていくことも考えた。

<図2>～3つの機能は互いに関連しあいながら、それぞれに自立・共生・個性につながる～



3 研究の内容

研究仮説を次のように定め、(1)場の設定、(2)高める方法に研究のポイントを置いて研究を進めた。

学習活動に生活指導の機能を生かす場を設定し、教師と子どもあるいは子ども相互の人間的なかかわりを支援の中心にしていけば、「自己決定力」を高め、「共感的関係」をはぐぐみ、「自己存在感」を広げていくことができる。

(1) 3つの機能に合わせた学習の場を設定する

☆「自己決定の機能を生かす場」とは、「自分の考えや学習する内容・方向を、自分で決定できる場」であり、教師から知識や課題を一方向的に与えられる学習の対極にある。

<「自己決定の機能を生かす場」の例>

- ・考えをまとめる ・課題を選択する ・問題を作る ・目標を定める
- ・調べる内容を選ぶ ・自分の態度を決める ・自分で考え、行動する など

☆「共感的関係をはぐくむ場」とは、「お互いのよさやちがいを認め合えることにつながる人間的なかかわり合いの場」であり、形式的な言葉や態度をこえたところにある。

<「共感的関係をはぐくむ場」の例>

- ・自分の考えを伝える ・お互いにアドバイスする ・一緒に問題を解く
- ・コメントをもらう ・共同作品を作る ・対話を取り入れる など

☆「自己存在感を確かめる場」とは、「自分が果たした役割を、自分で感じたり、人に認めてもらったりして感じる場」であり、他との比較で自分をとらえない評価である。

— <「自己存在感を確かめる場」の例> —

- | | | |
|----------------|----------------|-------------|
| ・納得のいくものが作れた | ・自分の目標を達成できた | ・自分の作品が飾られた |
| ・自分の考えが取り入れられた | ・代表としての役割が果たせた | など |

この3つの機能を生かした場を学習の中に取り入れていくことは、教師主導から子ども主体の授業への転換、教師と子どもあるいは子ども相互の感情を軸とした人間的な関係を中心に展開される授業を目指すことである。そこで、「自己決定」・「共感的関係」・「自己存在感」の3つの機能を生かし、3つの力へと高める方法が必要となる。

(2) 3つの機能を生かし、3つの力を高める方法を考える。

☆教師のあり方を変える

- ①意識 — 3つの機能を生かした授業を常に心掛けるとともに、どうしたらどの子どもも自信と喜びをもつかを意識していること。
教師自身の意識や支援のあり方を向上させるために、教師の自己評価カードをつける。
- ②態度 — 授業の中で、進んで子どもとかかわりをもち、カウンセリングマインドを生かした態度で接する。
- ③支援 — 一人一人の子どもが、授業場面でどのようになるかを具体的に想定して、具体的な支援を考える。

☆授業に機能の場やかかわりの手だてを入れる

- ①構成 — 3つの機能を生かす場を指導案の中に位置づける。
- ②ふれあいの時間 — お互いに、その授業の中で感じたことを話す時間を設ける。
- ③評価 — 教師から子どもへの情意的なサポートをねらいに入れた自己評価カードや子ども相互によさやちがいを感じたままに書く相互評価カードをつける。

4 研究構想図（次頁）

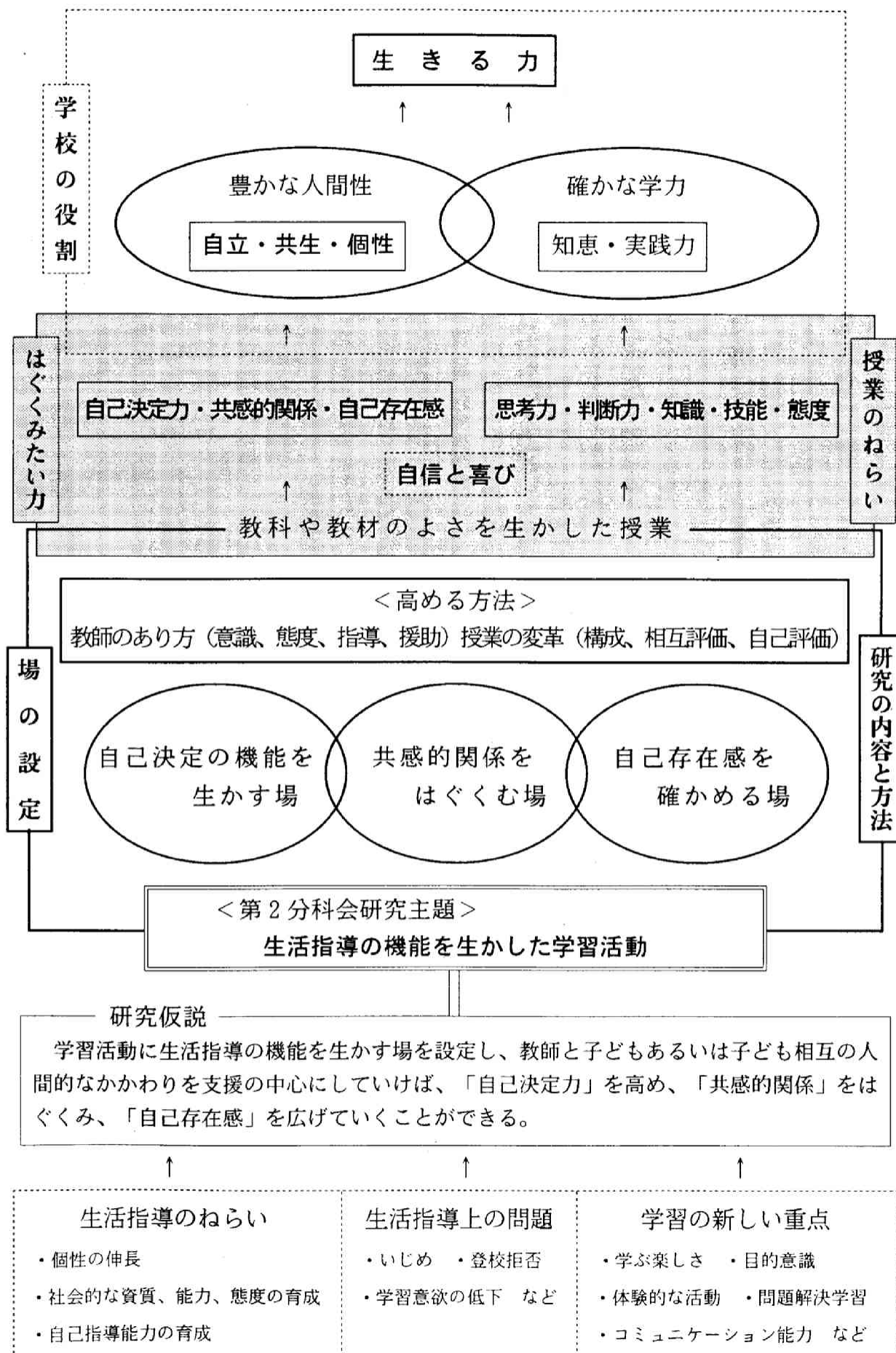
5 実践研究

実践事例1 <小学校>第5学年 家庭科

「生活に生かすために～世界でただひとつ、自分だけの袋を作ろう～」

学習内容： 世界のどこにも同じものがない自分らしい袋を作り、それにおやつを入れて、みんなで遠足に行こうと意欲づけをした。そして、自分なりの見通しをもって製作の計画を考えるようにした。児童一人一人のこうしたいという願いを可能なかぎり受け入れ、技術面、精神面を支援していく指導計画を立て、どうしたらどの子どもも自信と喜びがもてるか、それにはどのように教師が対応したらいいかに着目して実践を行った。

4 研究構想図

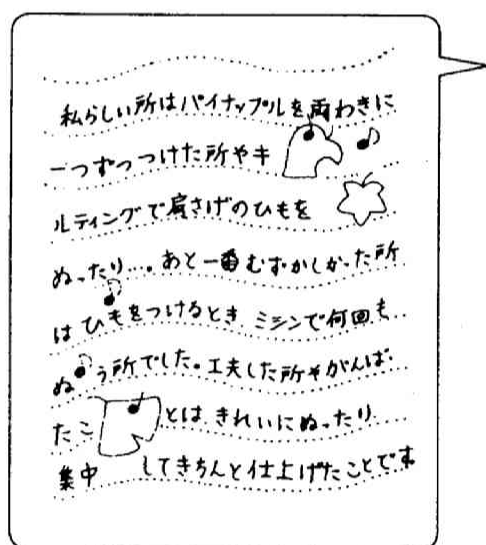


生活指導の機能を生かすてだて

自己決定	- 必要な時間を十分とる。 - アイデアがわからない児童のために、実物に近い形の見本をなるべく多く用意する。 - 難しいものに挑戦する児童には、そのために何を必要とするかを十分話し合い、やる気をそがないように注意しながら決定を支援する。 - 人のまねでない、見本と同じでない、自分らしさがどこに現れるか、一人一人と確認しあう。
共感的関係	- 何人かでグループをつくり、互いにアドバイスしながら製作できるようにする。 - 完成した作品を互いに鑑賞しあう。 - T・Tとして、保護者の方に指導の補助にあたってもらい、教師が人間関係に気を配れるようなゆとりをもつ。
自己存在感	- 全員が作品として完成するように最後まで支援をしていく。 - 完成した作品は、自分らしさ（工夫したところ）がわかるように、展示の工夫をして展覧会で発表する。 - 完成した袋をもって学年で出かける機会をもち、満足感を味わえるようにする。

児童の自己評価

自己決定	- 私はあまり流行にのっていないから、肩さげ型にして、ひまわりを3つつけて自分らしさをあらわしました。 - 持つところの色にこだわった。 - ポケットを裏につけるはずだったけど、表に縫い目が出てきたなくなるから、予定を変えて表につけることにした。 2時間かけて作ったポケットだったけど、使いにくいし、全体のデザインがこわれるので、迷ったけど実際には取りつかなかった。 - 最初は手さげ型にしようと思ったけど、手に持つのは面倒だからナップサック型に決めた。 - 飾りをつけようと思ったけど、色を考えてシンプルな方がいいと思った。
共感的関係	- 最初はA君にミシンの使い方を教えてもらった。あとで今度はB君にミシンでどこをどうやって縫うかを教えてあげた。 - C君が口あきどまりの縫い方をやりやすく教えてくれた。 - D君が、どうやって金具をつけるかをていねいに教えてくれたおかげで、うまくできた。 - ボタンの格好いいつけ方を教えてもらった。
自己存在感	- 一生懸命作った自分だけのナップサックだ！早く使ってみたいと思った。 - やったあ。糸がほつれて、ミシン縫いが見えてて、ひもがまがっているけれど、うれしい。 - 前考えていた時よりちょっと変わったけど、自分の思い通りできてすごくうれしい気持ちでした。 - 自分で作ったかいがあった。とてもうまくできていて、とてもうれしい。かえるのマスコットをたくさんつけ、表情もいろいろ変えたから本当に良かった。 - 早く使いたいな。でも私自慢の肩さげかばんなので、大切にしておこうかなと思いました。



【確認できたことと残された課題】

自己決定する力を育てるには、①一人一人の子どもにあわせて、受容したり、つきはなしでみること②時間を子どもと確認し、見通しをもたせること③事前にこの先の学習に必要な基礎的な技能を習得させておくこと④見本を用意し、成功への期待感をもたせること⑤教師が相談者となって意欲を高めること⑥解決する課題の難易度が適当であることなどが必要であることが分かった。さらに、共感的関係、自己存在感を高めるために、児童自身がつくる自己評価カードの工夫、教師が生活指導の機能3つの視点を意識して授業に取り組むために、先生ふりかえりカードの工夫、そしてこれらが見てすぐわかる指導案の書き方を工夫することが課題として残された。

実践事例 2 <小学校>第5学年 道徳

「自由と規律」(1-③) 資料「うばわれた自由」(文部省資料①)

学習内容: 「自由と規律」について、資料を通して具体的に問いかけることによって、自由を大切にするためにはどうしたらよいか、自分の生活を振り返りながら考えた。小グループの活動を中心にして学習を展開した。

【学習の展開】

	学 習 活 動	生活指導のよさを生かす場	手 だ て と 支 援
導 入	「自由」という言葉から、どんなことを思い浮かべますか。		
	1 「自由」について自分の考えを短冊に書く。 2 友達の考えと比べながら短冊をはる。	自己決定 ●自分の考えをもつ。 共感的関係 ●自分の考えと友達の考えの共通点や違いに気付く。	●考えがまとまらない児童には、個別に生活場面を思い起こしてみよう支援をする。 ●グループで協力しながらはるよう支援する。
導 入	「自由」に対する友達の考えに対して、質問や感想を話してみましょう。		
	3 友達の考えに対して、質問をしたり、感想を発表したりする。	共感的関係 ●自分の考えと友達の考えの共通点や違いに気付く。	●友達一人一人の短冊に目を通しておくよう支援する
展 開	4 資料「うばわれた自由」の前半を読む。		●黙読をする。
	王子とガリユウーになりきって、それぞれの気持ちを想像してみましょう。		
	5 二人の気持ちを想像しながらグループで役割読みをする。	自己存在感 ●役割を分担することによって学習形成者の一員としての意識を高める。	●一人一役の分担になるように支援する。 ●どちらの立場をより想像したいか選ばせる。 ●二人の争いの視点を明らかにする。
	6 王子とガリユウーの自由に対する考え方をそれぞれの立場に立って想像する。		
	王子とガリユウーの自由に対する考えについてどう思いますか。		
	7 王子とガリユウーの自由に対する考え方について、自分の考えを発表する。	自己決定 ●自分についての自分の考えを整理する。	●自分ならばどうするか、立場を置き換えて考えてみるよう支援する。
開	王子とガリユウーのその後を読んでどう思いましたか。		
	8 資料の後半を読んで王子の心情を想像し、感想を発表する。	共感的関係 ●自分なりに考えたり、友達の考えを理解したりする。	●黙読をする。 ●同じ意見・付け足し・違う意見がわかるように挙手で合図し、相互指名する。
	9 初めに連想した自由と今の考えを比べてみる。		
終 末	学校生活の中で、自由をどのように考えればよいと思いますか。		
	10 自由についての考えをワークシートに記入し、発表し合う。	自己決定 ●自由についての自分の考えをもつ。 自己存在感 ●自分の考えを発表し、みんなに聞いてもらう。	●休み時間など、楽しく遊べなかった時のことを思い起こすような支援をする。 ●ワークシートを工夫する。

【生活指導の機能を生かす手だて・学習活動における児童の反応】

生活指導の機能	3つの機能を生かす手だて	児童の反応
自己存在感	●「自由」についての連想を短冊に書いて各自が掲示する。 ●小グループの中で、一人一人が役割を決めて、資料を読む。 ●「自由」についての自分の考えをもち、友達に話をする。 ●記入したワークシートを掲示する。	●友達の考えと似ているとか、ちがうとかを見つけるのが大変だった。 ●一人一役あると、やる気が出る。 ●短冊を見ていたから、友達の言うことがよくわかった。 ●先生の赤ペンが楽しみ。
共感的関係	●自分の考えと友達の考えの共通点や違いに気付く。 ●互いの希望を尊重しながら、協力して読みの役割を決める。 ●発表を聞いて、自分なりに考えたり友達の考えを理解したりする。	●自分では考えもしないようなことを連想している人がいた。 ●同じ考えの人がいてよかった。 ●友達の考えを聞くのが楽しかった。 ●自分も話せてよかった。
自己決定	●「自由」について自分なりに連想したことを短冊に書く。友達の考えと比べて、より近い考えで分類して掲示する。 ●「自由」についての自分なりの考えをもち、発表する。 ●平素の生活に立ち戻って、友達とのかかわりを通して「自由」についてワークシートに考えを書き、発表する。	●初めは、なにを書いていいかわからなかったけど、だんだん自分の気持ちが決まってきた。 ●発表はできなかったけど、ワークシートに書くことができてほっとした。

【生活指導の3つの機能を指導案に組み込んだ成果】

- 学級集団の中で、児童一人一人が自分の考えを受け止めてもらったり、納得のいく学習活動ができて喜びを感じたりできる場面が従来よりも多く見られるようになった。その結果、一人一人のよさが、今まで以上に浮き彫りにされ、友達のよさに気付く児童が増え、互いに声をかけ、励まし合う姿が多く見られるようになった。
- 3つの機能は独立したものではなく、常に重複したものだが、一人一人をより大切にしていけることを重点として指導にあたった。自分が集団の中で役に立つ存在である、自分の考えが分かってもらえるという自己存在感を強く感じるようになったとき、児童はその時間の活動を「楽しかった」と表現した。また、児童が満足感を覚えたときは、必ず、共感的な関係も、自己決定の力もそこに有効に働いていたことも分かった。指導者側の視点が変わったことで、児童の物の見方、考え方に大きな影響がでたことが確認された。



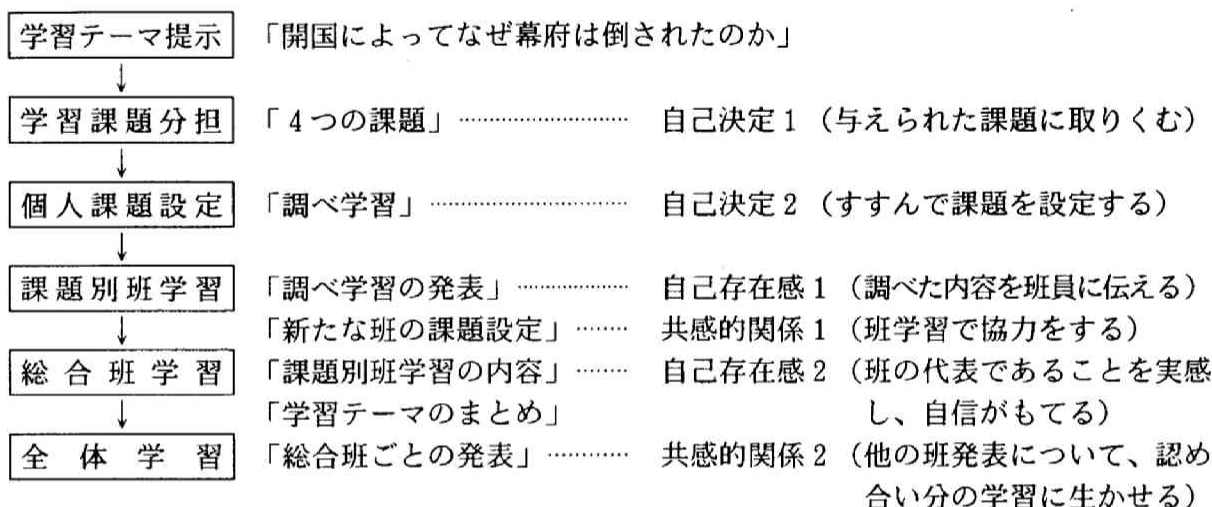
学校での生活の中で、自由にもとりよ
うに考えたいと思いますか？



実践事例 3 <中学校>第2学年 社会科（歴史的分野）
 单元名「幕末の社会の様子（開国から倒幕へ）」

(1) 学習の流れと生活指導の3つの機能について

- ① 指導計画のそれぞれの時間の中に、生活指導の機能（自己決定・共感的関係・自己存在感）を重点的に扱えるように計画した。
- ② 学習形態としては、一人の生徒が2つの班に所属する班学習で実施した。
- ③ 生活指導の観点については、「場の設定」と同時に、生徒の変容に着目してそれぞれの観点が力が高められるように計画した。



(2) 本時の展開における教師の支援

生徒一人一人について、「自己決定について支援が必要なタイプ」「共感的関係について支援が必要なタイプ」「自己存在感について支援が必要なタイプ」に分けた。それぞれのタイプの生徒に対して、あらかじめ手だてや支援の方法を「生徒のタイプ別支援記録簿」に記述しておき、授業の中で生徒の実際のようにすについても記入できるようにした。

●「自己決定」が苦手なAさんへの支援記録簿

生活指導の機能	学 習 活 動	生活指導の機能
共感的関係からの はたらきかけ	◎学習での自己決定の場面 ◇Aさんの姿 ▼教師の願い	自己存在感への はたらきかけ
●班で順番を決めながら発表するように促す	◎自分の調べたことを発表する ◇すすんで発表しない ▼調べた内容を自分で発表させたい	●他の班員の発表を聞かせて、発表方法を理解させ、自信を持たせる
	調べた内容が十分でない部分もあったが、自分のワークシートの内容を読み上げた	Aさん以外にも、発表方法について、一緒に指導することができた
	◎ワークシートに自分の意見を記入する	

	◇悩んで書けない ▼自分の考えを表現させたい	← • 答えられないことは 班の課題にすることを 告げて、自信を失 わないように助言する
	教師の支援でまとめた	質問を3つして、答えさせた
• 班長に指示し、質問に限らず感想も含めて発言できるように促す	◎他の班員の発表に対して質問する ◇質問しない ▼他の班員の意見に注目させ、班員との関わりを持たせたい ◎他の班員からの質問に答える ◇答えることができない ▼答えられなくとも、班学習にすすんで参加する姿勢を持たせたい	← • 答えられないことは 班の課題にすることを 告げて、自信を失 わないように助言する
班長が指名して、発言を促したが、発言はできなかった	Aさんの態度を中心に見ていたが、聞きながらワークシートにメモしていた	Aさんに対して質問の内容を確認させた
• だれでに発言できるような班内の雰囲気づくりに努める	◎班の話し合いをする ◇何もいわないで座っている ▼積極的に話し合いに参加し、発言させたい	← • Aの発言が他の班員の役に立っていることを実感できるように、ワークシートにAさんの氏名を書かせる
適宜、班に助言した	発言まではできなかったが、聞く態度で参加した	他の班員がAさんのワークシートを写し取った
授業のメモ Aさんの「自己決定」が高まったと思われるのは、「共感的関係」からの支援を行ったときで、やや「すすんで参加」する姿勢や態度に表れていたと思う。 発言をすることについては、「自己存在感」の観点での支援を次に計画していくと効果的だと思う。		

(3) 自己評価について

教科の評価に加えて、生活指導の観点を評価できるように工夫した。

班の話し合いに参加し、意見を言った	自己決定に関する評価
班の話し合いで新しく調べようと思った	
他の人に自分の調べたことを発表できた	
他の人からの質問に答えられた、または、考えた	自己存在感に関する評価
自分の調べたことが他の人の役に立ったと思った	
班の中で自分の責任が果たせた	
他の人の発表から自分の学習に生かしたいことがあった	共感的関係に関する評価
班の話し合いをするために協力した	

(4) 実践の成果

① 学習形態について

生徒一人一人が、複数の班に所属する形態をとったため、「共感的関係」は深められた。生徒の感想としては次のようなものがあった。

- 学習テーマは難しくしてどうしていいかわからないこともあったが、班員が教えてくれたところはよく分かった。
- 自分の調べたことが他の人に役に立ったのがうれしかった。
- 班の中での発表だったので、自分の意見が言えた。

② 生徒のタイプ別支援記録簿について

- 授業を計画する時に、教科のねらいの設定と生活指導の機能を生かす場を同時に組み入れることができた。
- 生徒理解に基づいて、一人一人の生徒の状況に合わせた効果的な支援ができた。
- 一人の生徒について継続的に観察することができた。

③ 自己評価について

- 生活指導の3つの機能について自己評価をすることで、教師の見方と生徒自身の見方の違いがわかり、生徒理解に役立った。
- 時間ごとに自己評価をすることによって、授業における生徒一人一人が取りくむ目標や重点が明らかにすることができた。

6 分科会のまとめ

(1) 研究の成果

① 生活指導のよさを生かした学習活動の実践

生活指導を機能としてとらえ、「自己決定」、「共感的関係」、「自己存在感」の3つを生かした場を学習活動の中に設定し、一人一人を教師が支援していくことは、子どもに自信と喜びをもたらし、生きる意欲を高めていくことを実践の中であらためて確認できた。

② 学習活動での具体的なてだての提案

「生活指導を学習活動に生かす」ことがあまり行われていない現状にあっては、教師がその意識をもち、授業のあり方を変えることが最も大切である。その時の具体例として、3つの機能の指導案への位置づけ、子どもへの支援記録カードの作成、自己評価カードの活用などを提示できた。

(2) 今後の課題

① 学習活動とその他の活動での相互実践

すべての活動に生きるのが生活指導である。その意味で生活指導のもつ3つの機能を生かす場は、すべての教育活動に設定できる。よって、学校行事や道徳・学級活動などの特別活動などにおいても実践することが重要であり、今後の課題である。

② 集団活動の取り入れ

教師と子ども、子ども相互の人間関係や子ども自身の存在感を高めていくために、グループ・エンカウンターや共同制作など、一つのものをみんなで取組む活動も行いたい。

IV 研究の成果と今後の課題

研究主題「生きる力を育てる生活指導」の下に、2つの分科会を構成し研究に取り組んだ。ここでは2つの分科会に共通にあげられる成果と課題について述べることにする。

1 研究の成果

(1) 小・中9年間を見通した生活指導の構築

2つの分科会とも、小学校5名・中学校5名の10名ずつで構成した。このことは小・中の教師のどちらの側にも、子ども観や授業観を長いスパンの中でとらえることの重要性を認識させた。それが、小・中の子どもたちの実情を発達段階的に理解し、系統立てた支援のあり方を考える上でとても有効であった。同時に、今後も小・中合同の研究を推進していく重要性を確認した。

(2) 「生きる力」につながる生活指導観への変換

2つの分科会も「生きる力」につながる「豊かな人間性」に焦点を当てて研究を進めた。第1分科会は豊かな人間関係を育成する要素としての3つの要素を生かした集団活動を行うことによって、第2分科会は生活指導の機能としての3つの機能を生かした学習活動によって、子ども一人一人の豊かな人間性を伸ばしていこうと考え、実践した。このことは、日々の教育活動のすべてを生活指導の観点からとらえ直すことにつながった。これからは、「生きる力」を育てることをねらいとして積極的な生活指導を推進することの重要性を再確認することができた。

(3) 授業における生活指導の位置付けの明確化

2つの分科会とも、教師と子ども、あるいは子ども相互の人間関係や存在感に視点を当てて研究を進めた。このことによって、授業を通して子どもたちの人間関係の改善を図ったり、自己存在感を高めたりすることができた。いじめや登校拒否の予防には欠かせない「生きる力」を教科の学習の中ではぐくむ方法を示すことができた。

2 今後の課題

(1) 具体的な実践の積み重ねや支援のあり方の検討

小学校の体育・道徳・家庭科、中学校の社会で研究授業を行ったが、検証にはもっと多くの実践が必要である。小・中学校ともに他の教科及び領域等でさらに実践研究を深めていくことが重要である。

(2) 長期にわたる研究継続の必要性

日頃の教育活動において、小学校と中学校が連携・協力して教育を進める機会が少ないのが現状である。したがって、一つの問題を考える時、共通理解するまでとても時間がかかった。長期に渡る研究の継続によって共通理解の内容を増やして、理論と実践を高めていくことが望まれる。